G・エリオット小説研究ノート

松山信直

序

今日 George Eliot として知られている Mary Ann Evans は、一八五六年九月、三十七才にして最初の小説を世に問うた。彼女はそれ迄にシュトラウスの『キリストの生涯』、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』などを飜訳し、更に、二・三の評論紙に於て宗教・哲学・歴史・文学・自然科学などの広汎な分野にわたる評論を試み、創作活動に入る迄に既に少壮国秀評論家として Charles Bray, Charles Hennel, S.S. Hennel, George H. Lewes, Herbert Spencer 等の当時の急進的思想家に伍して活躍していたのであつた。小説家としての G. Eliot は、彼等哲学者・思想家が形而上的に扱う問題を現実的な人生及びその諸問題に適用し、G. W. Cooke が指摘する如く the truest literary representative the nineteenth century has yet afforded of its positivist and scientific tendencies.[1] として英文学史上特異な地位を占めている。Eliot は読者の想像を愉しませる種の所謂物語作家ではあり得なかつた。彼女の創作活動は、心情と想像力に依る創造の衝動に駆られたというよりはむしろ、前記の思想家達と交る事を得た高度の知性に依る批評の衝動に駆られたものであつた。論理的思索と批評の訓練を経た彼女の知性は、Victoria 朝の小説の共通的な特色であつた客観的描写の精神に基いて描かれる人生を、科学的に、而も徹底的に分析・解剖し、諸事実の原因と結果を追究して人生の綜合的な批判をその内面に於て試みた。Eliot の小説を可能ならしめたのは、この人生に対する知的思索に inspire された創造力であつたと云うべきであろう。

しかしながら、A.W. Ward の述べる如く、道徳的判断は「彼女の存在活動中で最も責任あるもの」[2]であつたため、人生に関する真摯な思索は常に道徳的判断の形式をとり、彼女の小説の中核となつた処の新時代の前衛思想家達から学んだ合理的人間観は、一種独特の道徳律を形成するに至つた。Puritanism には早く訣別したと雖も、Eliot の気質には善悪に対する Purtian 的潔癖さ、敏感な罪の意識がその名残として留り、Meliorist[3] としての自覚と相俟つて、道徳的である事を常に念頭に置いていたと云えるのである。この道徳意識は、時と

して彼女を悩ませ、作品に一抹の melancholy を漂わせる結果となり、又、芸術的にも問題であつたが、彼女の唱く道徳には、既に精神と物質の相剋を経験して懐疑と動揺の世界に追い込まれていた Victoria 時代の人々の耳目を欲てる魅力があり、彼女の自信に満ちた厳然たる態度には時代の先端を歩む予言者の爽快味があつた。というのは、彼女の道徳が皮相的な教訓ではなく、高度の批評精神を持つた知性が人生に下した合理的な解釈をその裏付として持つていた事に依るのに外ならない。

Eliot の小説は David Cecil の適切な言葉に依つてとらえられた如く、本質的に「人生の批評」[4]であつた。知性と道徳意識は、それぞれ、人生の批評を可能ならしめた機能と criterion を与えたのである。

I 人間観

H. Spencer 一派の唱えた進化論の結果として、Victoria 朝中期では、人間に対して科学的な新しい認識が行われ、従来の超自然的神秘の veil は脱ぎ棄てられて、所謂進化論的人間観が樹立された。この影響の下に G. Eliot は人間を本質的に歴史的な存在であるとみなし、歴史の有形無形の支配を受ける人間を表現した。

先づ第一に挙げ得るのは遺伝という歴史的伝承観念の適用である。heredity という言葉は作中に屢々好んで用いられて居り、Tom Tulliver, Maggie, Tito Melma, Romola, Mary Garth, Rosamond Vincy, Fred Vincy などの運命は潜在的な遺伝の支配下にあつた。特に性格が遺伝的である事は Eliot の作品を通じて見られる重要な構成要素であつた。

しかしながら、Eliot の小説に現われた遺伝の概念は極めて漠然としている。る彼女がどの程度の遺伝学的知識を持つていたのか正確な傍証は無いけれども、一八六五年に書かれたメンデルの遺伝法則が世に知られたのは書かれて三十五年の後の事であつたのを考慮すれば、当時の科学界では、恐らく、親の或形質は遺伝するといつた程度の漠然とした知識があつたに過ぎないのであろう。Eliot のいう heredity も漠然とした先天的伝承程度の範囲を出ていなかつた。更に Eliot には異常形質の強調も見られない。従つて、Zola の描いた様な異常形質の遺伝による宿命的悲劇を Eliot に期待する事は出来ない。Eliot には遺伝そのものが悲劇である場合は見られない。

Maggie の情熱的な性格は作者の創造に依る特異性を持つていたが、兄と比較してみると、二人の性格は対照的な父母の性格を反映する相対関係にあり、更にその対立はタリヴァー家とドドスン家という全く異る血統の二家系に迄源を辿る事が出来る。一応ここに遺伝——伝承を認める事が出来るが、Eliot の目的は一家系に伝る運命的な不可抗力を描く事にあつたのでは無く、性格・気質・習慣・生活態度など総ての点で相対的な二つの家の人々が生み出す fictions な面白さを描く事にあつた。従つて、Tom と Maggie が遺伝的に異る性格を持つていた事を悲劇とみなしても、その悲劇には相対的な二家系の人々が描き出す戯画が伴われ、悲劇自体に決して宿命的な暗さを盛られる事は無かつた。

この様に遺伝それ自体は宿命的悲劇には遠く、遺伝そのものの概念ですら極めて曖昧であつたが、一方に於て、生活感情を歴史的であるとみなした事は、明らかに歴史的存在としての人間観の強力な、且つ根本的な主張であつたと見ることが出来よう。Eliot にとつて、我々の生活感情は歴史的な基礎を持つた伝統的存在であつた。

Fortnightly Review に於て、Eliot は「総の偉大な人々は長い間漠然とではあるが、伝統は真に我々の最良の人生の基礎であるとの感を抱いていた」と述べ「我々の sentiment は生命体化された伝統といわれるであろう。又、我々の行動の大部分は、我々の人生以前に行われた人生や行動の記憶からその正当性、魅力、気品を得ている」[5]と言葉を続けて、人間の歴史への依存を説いている。伝統とは現在に伝承されている過去の時代の経験・感情・憧・苦痛・悲哀・叡智など過去の時代の生活感情であつて、Eliot は現代の生活感情を生命体化された伝統とみなし、我々に先立つ人々の人生、即ち過去を人類の歴史的経験として、その経験の上に現在の人生の基礎が置かれていると考えた。過去は一つの経験であり、その貴重な経験から得られた伝承物は伝統として現在を支配するのである。「伝統、それは英国の地方生活にいわば地の塩の役をはたして来たものであつた」[6]と。

この過去に対する態度、広義に云えば歴史的存在としての人間観は、単なる思想としてよりも、作者がそこからモラルを導き出している点に特別の意義があつた。Eliot は「人はその過去の歴史より離れる事は出来ない」[7]という命題から、Maggie の信念であつた「過去との結びつきを破る様な未来を望まない」[8]という処世態度を要求する。過去は現在の人生の基礎であると同時に、来るべき未来にとつても同様に基礎であらねばならなかつた。人はその様に未来に処して行かねばならない。この意味に於て、過去はモラルの criterion であり、又 Eliot にとつて人生の中で「決定的・絶対的」[9]であつた義務は、我々が常に伝統の中に生活している事により見出せるのであつた。「苦し過去がわたしたちを束縛しないのなら、どこに義務があるというのでしょう。その場その場の愛情（inclination）のほかにはなんの掟（law）もないことになるでしょう」[10]と Eliot は Maggie に云わせている。この様に、Eliot は過去を掟とみなして、道徳上では保守的な立場をとつたが、それは、理性的には進歩的な歴史観を認めながらも、生活感情の上では尚も古いものに憧れる Eliot の気質上の相剋の表現であつた。Eliot は常にこの相剋に苛まれていたが、*Mill on the Floss* の前半では厳格なモラルを導く過去を愉しかつた幼年時代として、回想形式で表現し、モラルを完全に情緒に溶け込ますことに成功している。美しく愉しかつた幼年時代を美しい想い出として振返る事が出来たのは、現在の生の楽しさを倍加したが、それと同時に、その想い出の美しさを傷けたくない願いが自らモラルの働きに代つて行き、Maggie は、兄と共に愉しく過した幼年時代の美しさを常に心の拠り処として幾多の誘惑に剋つ事が出来たのであつた。

Our finest hope is finest memory. *Felix Holt* の Epilogue に掲げられたこの言葉は、Eliot の過去観が厳格なモラルであると同時に美しい回想の情緒でもあつた事を示している。想い出として過去を慈しむ事に於て、Eliot は進歩的な歴史観と保守的な道徳の妥協点を見出したのであつた。[11]

本質的に歴史的存在であつた人間は、歴史的に環境の内に於て淘汰され、進化するのであるから、進化的という事は社会的である事と同意義であつた。環境は人間にとつては明らかに外部に存在するけれども、歴史的存在としての人間の環境は彼の生存の場所であつて、彼の生存にとつては本質的な條件であつた。

この様な観念に導かれて環境を強く意識した事は Eliot の大きな特徴であつて、個人に及ぼされる環境の働は細心の注意を払つて描写された。勿論、人間を環境の中に於て描写する中は、環境の中に存在す

る事が人生の必然である以上当然であつた。Eliot に於ける環境は、初期の作では単なる背景の位置に留るが、後期の作に至る程個人に対する働きかけが強くなり、自然主義的な社会制約を形成するに至つている。*Middlemarch* の社会は、社会それ自体は平凡であつたが、幾人かの偉大な魂をゆすぶり、冷酷な壁の如く彼等を四囲から圧迫した。その非人間的な無情は近代社会の mechanism の現われであると見る事が出来る。社会の内では「卓越した感情ですら過誤の相を呈し、崇高な信仰でも幻想の相を呈する」[12]事があると Eliot は述べている。

Eliot がこの様に環境に一種の力を与え、環境に左右される人間を描いたのは、単に、皮相的な社会と個人の相剋を描かんが為ではなかつた。人間をその内面に於て把握するという事は Eliot の作家態度の根本的特徴であつた。

精神生活を無視した人生は Eliot の脳裡に何の感興も呼ばなかつた。精神生活、魂の問題、それが Eliot の興味と関心の中心であつた。しかるに「如何に精神内容の強大な人でも外部にあるものに大きく左右されない人は無い」[13]と Eliot 自身述べている様に、環境の働きかけは、人間の精神に於て著しい影響を認める事が出来るのであつた。換言すれば、Eliot は人間の精神に進化論的展開を認め、魂は外界との接触によつて得られる経験の影響を受けて展開すると主張したのである。Eliot が環境を重視したのは、この様に環境からの働きかけが精神を進化論的に展開させる為であつた。人間が社会的である事の意味は、社会機構が機械的で、その中では個人は無能に等しいといつた社会構造に於て追究されるのではなく、人間の精神に及ぼされる影響の考慮の下に追究されるのである。

× × ×

さて、この様に人間を歴史的存在・社会的存在とみなす進化論的人間観は、勿論 Eliot の創意になるものではなく、実証主義の産物として H. Spencer、或は G. Eliot の事実上の夫であつた G.H. Lewes に、より精緻な、体系的な主張を見る事が出来る。G. Eliot は特に G.H. Lewes から多くを学び、彼に啓発される処多かつた様である。[14]

II 性格の問題

G. Eliot にとつて人間の運命を決定する要素は行為であつた。行為そのものが運命であつたとも云い得る。*Adam Bede* の Arthur を知る者は、彼の生涯が Hetty Sorrel に対する戯れの恋によつて全く決定されたのを見る。又、Eliot は Renaissance 後期の Florence 政界の大立物 Savonarola を、その高邁な人生観や思想の故ではなく、それ等を具体化した彼の行為によつて批判している。人間は行為によつてのみ自己を表現し得るのであり、行為がその人の総てであつた。しかし、Eliot の考えた行為の重要性——少くとも、人間の運命を左右するものとしての重要性——は、行為に内在するというよりは、むしろ、行為のもたらす結果の倫理性に在つた。*Adam Bede* に於て Eliot は「結果は無慈悲である。……我々の行為は事前の如何なる躊躇逡巡にも拘らず或結果をもたらす。……結果が我々の内部に閉込んでいる事は殆ど無いのであるから、どう言訳しようかと考える代りに、この確実性に留意しているのが最善なのである」[15]と作中人物の一人に云わせている。従つて、この観念に依れば、行為は我々の如何ともなし難い結果を外部に及ぼすが故に、我々の意志を無視して「行為は我々を決定する」[16]と云い得るのである。然しながら、行為はその当為者を離れては存在せず、行為の結果の倫理的責任は当然行為の当為

者に課せられる。そこで、Eliot は行為の胚芽をその人の内部に求め、その人の本性と行為を結びつける事により倫理的判断の根拠を求めたのである。

「人間はその人の本性に合致せざる事を為し得ない。人はその最も例外的な行動の胚芽をも自らの内に有している」[17]という言葉が、*Adam Bede* 中に見えているが、ここに云う一個人の本性 (his own nature) とはその人の意欲・行為・態度などを一貫する確固とした根本特質であつて、文学的にはその人の性格として描かれるべきものである。

この様に、行為の胚芽は性格の内にあるのであるから、行為と性格の間にはバランスがあり、行為の倫理的責任は性格に於て追究されるべきであつた。

Eliot の作中人物の性格と行為に不調和、矛盾が見られないのは、単なる芸術的効果上の要求ではなく、この Eliot の倫理観の意識的な要求であつたと云える。

然しながら、性格は決して単純でなく、複雑そのものである。その複雑な性格中の如何なる要素が行為に結びつくのかを見極める事は非常な困難に違いなかつた。Eliot 自身 C. Bray. の *Philosophy of Necessity* について著者に宛てた手紙中で、彼の著書の根本原理——精神は他の総ての現象と同じく前件の結果の不変性という状況の下に現れる——に同意を表明すると同時に、人間の内面生活に於ては「現象がより複雑である為に真の前件と結果を見出すのは比例的に困難である」[18]と指摘している。Eliot の作品に見られる解剖的手法、即ち、情熱・動機・思想・感情・心理などの細かな解剖・分析による内面からの性格描写は、行為の隠れた因子を複雑な性格中に求める処から生れたと云う事が出来る。

この様に、Eliot は人間の本性と行為とを倫理的に結合させた故に、作中人物の性格を些細に調べるならば或程度その人の運命を予測する事が出来る。Arthur (*Adam Bede*), Dunstan, Godrey (*Silas Marner*), Tito (*Romola*) など悪、若くはそれに類した堕落的行為の人々は、その行為の因子として或共通した性格を持つていた事が認められる。Arthur は苦痛に遭うのが嫌で、快楽を与える人として自分に感謝の眼ざしが向けられるのを好んだ地主の若旦那であるが、当然受けるべき苦痛をも回避しようとする性向があつた。Tito も又苦痛に直面する勇気がなく、容易になし得るものにと向う傾向があり、*Silas Marner* の二人についても同様の事が云える。Eliot は *Adam Bede* をして「唯たやすくやれるからとか、自分にとつて快いからというだけであれやこれやに手をつけるなら、この世ちや悪の道に踏み込むことはうけ合いだ」[19]と云わせているが、この倫理観が堕落的人物の行為を律するばかりでなく、行為の胚芽である性格をも既に律していたのである。

作中人物は、個性的に描かれながらも悪に至る共通的胚芽を性格中に持つている点で、更に、その胚芽が盛長してやがて彼の全人格を支配して堕落という運命に陥らせる共通的過程を持つている点で、類型的な悪の型を認める事が出来る。同様の事は Janet (*Janet's Repentance*), Maggie (*Mill on the Floss*), Romola (*Romola*) などの、renunciation によつてより高い精神的状態に到達した女性の群についても云えるであろう。

これらの事から、G.W. Cooke の指摘する如く「*Adam Bede* に於て、又、*Scenes of Clerical Life* や *Mill on the Floss* に於て Eliot は現実の人物の代りに性格の類型を描いた」[20]といい得るのであるが、

Eliot の描いた作中人物全般について、類型的であると云うのは不当の様に思える。彼等の生活感情や気質は極めて個性的で、類型的な悪の発展を持つ。Arthur と Tito を比較してみても、あらゆる点で彼等は現実の二人の人間の如く異つている。この事は、Eliot の作家としての視点が彼等を全体的な存在として個的に捕える一方に於て、モラリストとしての視点は、表面上の観察から道徳的な判断を求めている事を示すのである。人間を個的に把握しながらも、尚その個の内に倫理的な普遍を求める事は Eliot の創作態度の著しい特色であつた。

さてこの様に性格は行為を導く胚芽であつたが、性格が運命の総てでは無かつた。前述の如く、人間は本質的に社会的・歴史的存在であつて、その存在条件である環境を無視する事は出来ない。人間の運命は本質としてのその人の本性と環境との相関の下に形成されるのであつた。Hamlet について Eliot は次の様に述べている。

「人間の生涯の悲劇は内部からのみつくられるのではない。『性格は』とノヴァリスは彼の箴言の一つに云つている。――『性格は運命を決する』と。しかし、それは必ずしも真理ではない。性格はわれわれの運命のすべてではない。なるほどデンマークの王子ハムレットは懐疑家であり、意志薄弱であり、その結果、偉大な悲劇が生じた。しかし、もし父王が天寿をまつとうし、伯父が早逝しておつたなら、ハムレットはオフェリアと結婚したであろうし、また義父に投げた無礼極まる暴言は問わないまでも、多くの独自や、ポロニウスの麗しい娘に浴せかけた憂鬱な諷刺にもかかわらず、生涯を通じて狂人の汚名をうけずにすんだことであろう、と考えることもできる。[21]」

同時に、外的な事件も運命の総てでは無かつた。Eliot の示した人間の運命とは、外的な事件に遭遇して対応する内的必然の結果に依つて展開するのである。

「性格は過程であり、展開である。[22]」と Eliot は *Middlemarch* に書いている。性格が固定せず dynamic であるが故に、更に一層環境が重視され、過去という確固とした人生の criterion が必要となるのであつた。性格の展開は内的必然の外部表現として現れ、新たな行為の胚芽を生む。而して、性格を展開せしめる因子は、前述の外界との接触により変貌する精神内容である。ここに魂の進化論的展開が再び問題となるのである。

Ⅲ 魂の問題

Tito は難破に依つて養父と別れて唯一人 Florence に辿り着いたが、養父は奴隷になつた。其後 Tito の許に養父から救を求める便りが入つたが、彼は肌に着けて居た養父の指環を、ただ自分の生活の保安と安楽の為に売払つて、養父の許には身代金はおろか便り一つ出さず、完全に養父を黙殺した。この Tito の行為を描いた後に、Eliot は「Tito は徐々に性格を決定する善、或は悪の反復的選択が、唐突な行為の下地を作る、という人間の魂の峻厳な法則（the inexorable law of human souls）を体験していた。[23]」と述べている。

Eliot によれば、経験による習慣の形成は性格の展開の因子であつた。人間の魂には経験、即ち外界との接触に依つて撓められる可撓性があり、経験は繰返される事によつてその可撓性を習慣の形成に迄導く。ここに至つて、突発的な、今迄の人格にとつては意外である様な行為を生む性格の変貌が見られるのである。

Adam Bede では更に次の様に説明されている。

「我々の行為の内には恐ろしい強制性がある。それは先づ正直な人を

偽瞞者にし、次で彼をその変化に満足させてしまう。その理由は、二度目の悪は彼にとつては手がけられる唯一の正しいものの姿となつてみえるからである。罪を犯す以前には融和した常識と、魂のすこやかな眼識ともいうべき清純な曇らぬ感情でもつて眺められていた行動も、罪の後では巧妙な辯解というレンズを通して眺められるのである。美しいとか醜いと呼ばれるものは総てこのレンズを通して見たならば、どれも似た様な組織より成つている様に見える」[24]

経験が再び繰返される場合、良心はその第一回目の経験を正当化しようとして麻痺されている。ここに Eliot が魂の法則を求める経験を重視した理由があつた。個人の行為も、又過去も、経験として反復され魂の法則となる可能性を持つている故に重視されたのである。

かくの如く、Eliot に於ける魂は神祕的な不滅の絶対者ではなく、自然界の諸現象と同じく Comte の所謂 invariable law の適用を受け、C. Bray の謂う philosophy of necessity に従つて展開する。Eliot は特に悪の発展に於てこの魂の法則を強く意識していた。この法則の下に、徐々ではあるが、致命的な悪を重ねて、遂に、養父の Baldassarre に絞殺される Tito の性格描写は、その重厚で精緻な事、恐らく英文学史上類を見ないであろう。

為された行為は経験として魂の法則を導くのであるから、人生の倫理的な分岐点は最初の行為の motive にある。そこに良心と誘惑の葛藤が見られるのであつた。しかし、一度誘惑に負けた人には魂の法則が適用され、彼の良心は麻痺されるから二度とこの葛藤を見る事は出来ないのであるが、誘惑を斥けた人は、続いて第二の誘惑、第三の誘惑に遭遇するであろう。良心を持つ人の一生は誘惑の波に打たれる葛藤に始終する。Maggie の生涯がその様な生涯であつた。彼女は第一の誘惑に勝つた。しかし、続いて第二、第三の誘惑と闘わねばならなかつた。その間に彼女が学んだのは、第一の誘惑に勝つたその事は、第二の誘惑に直面した時何の援にもならなかつたという事であつた。第二の誘惑と闘う事は第一回目と同じく苦しい仕事であつた。

Eliot に於て、悪を持たない事は必ずしも善ではなかつた。誘惑を斥けた事は確かに悪を避けたと云えるが、それが必ずしも善では無かつた。善に至るには更に何物かが必要であつた。

「Human Goodness の第一条件は愛の対象を持つことであり、第二は尊敬の対象を持つ事である」[25] と Eliot は述べている。

愛と尊敬は Human Goodness に至る媒介であつたが、Eliot は愛について作中に屢々論議を繰返している。今少しく Eliot の愛について考察してみよう。

Adam Bede の中で Eliot は Arthur との愛を失つた Hetty が絶望と恐怖と孤独の悲哀を抱いて嘗て訪れた泉を求めて彷徨する様を描いて、次の様に述べている。[26]

即ち、作者が自然の美に彩れたロームシャーに来た時「私は、自分が今いる処はロームシャーではないと思わせるものに道傍で出会つた」「それは大いなる苦悶——十字架との苦悶の像であつた」若しこの十字架上の男の物語を知らない人がそこを通りかかつたならば、彼には「この苦悶の像はかくも美しい天地のさ中にあつて全くふさわしくないと思えたであろう」と、作者は考える。作者の描いた Hetty の悲哀は、その様な美しい天地の下にあつて全くふさわしくない、人に隠れた存在であつた、と。

勿論 Hetty の悲しみと Christ の苦悶は同一視されていない。が然し、共に人類の悲哀と苦悶の象徴であつた。Eliot は Christ の犠

牲的精神を賞揚する（これが Eliot の Christ 観であつて、彼女は其他の点では不可知論者の立場を示している）と同時に、Hetty の人に隠れた悲しみに同情する。人に知られぬ悲しみや苦しみは、人に知られぬが故に更に一層悲しく苦しい。「サラ〳〵流れる小川のせせらぎも、叢のかげに近接いてみれば人の耳には絶望的な人間のすすりなきを混えて聞えて来るでしよう」[27] と Eliot はいう。人の世はこういつた種の悲しみや苦しみにあふれている。従つて、この世には同情や愛が必要であると Eliot は説いた。而もその同情や愛は、悲哀や苦痛を持つた人ばかりでなく総ての事物・人間に注がれた。平々凡々な牧師 Amos Barton（*The Sad Fortunes of the Rev. Amos Barton*）はその凡庸の故に同情され、犬は物云わぬが故に同情された。

この Eliot の同情的な態度は、彼女の創作の著しい特徴で、写実的客観精神がこの同情や愛の衝動を抑えるのに成功したか否かは、L. Cazamian の指摘する様に[28]問題であつた。しかし、Eliot の同情や愛は、創作上の態度から更に一歩進んでモラルを形成するに至つている。

人間は、前述の如く、安易を求めて走る事は許されない。人間には耐えねばならぬ苦痛があり、それは又その人の悲しみであつた。従つて、道徳的な生活を営む人は何等かの苦痛や悲哀を常に抱いているわけである。而るに「悲しみは我々の内部に打ちかち難い力として、力の如くただ形を変えて、苦痛から sympathy へと姿を変えて住んでいる」[29] と Eliot 自身述べる様に、悲しみや苦しみに満ちた世界に於てそれ等えの共感――同情を持つのは共感の性質上、自らの内に苦痛を持つた人の必然であつた。この様に同情や愛は必然的に生れるのであるから、それ等を持たないのは人生の悲哀や苦痛から逃れようとする「真の祝福でない」[30] 生活態度であつた。

しかも、先に述べた如く人間は行為によつて自己を表現せねばならないのであるから、同情・愛の表現として、Romola の如く Florence の人々に博愛的奉仕の手を延べねばならなかつた。

かくの如く、同情や愛の衝動は博愛的・愛他的奉仕の行為へと発展する。而して、その間の発展段階に於て、Eliot は自己の利己的欲望を棄てる事を不可欠なものとみなしていた。愛の行為は renunciation を伴わねば崇高たり得ないのであつた。[31] Love must suffer before it can be disembodied of selfise desire. と Eliot は述べている。この selfish desire の放棄は Eliot のモラルの重要な主張の一つであつた。

恋愛に於ても、その感情の流露は自然であり、又、その欲望は最も強いものであろうが、この複雑な人生の内では、時として棄てねばならない悲哀を伴う。

厳かな悲しみをたたえて Maggie は恋人に語る。

「あゝ、むずかしいこと――人生つてなんてむずかしいんでしよう！人間は自分のいちばん強い感情のままになるのが正しいことのように、わたし、おりおり思いますの――でもそうすると、こういう感情は、わたしたちが生まれるまえからつくられていたきずな――たがいに頼りあう肉身のきずなと絶えず衝突して、それを切り放そうとするでしよう。もし人生が、天上の楽園にあつたときのように、ほんとうに気楽で単純であつたならば、そして、最初に逢つた人がいつでも……いえ、あの、もしわたしたちがひとを愛するようにならぬうちは、わたしたちはこの世の中に負うべき義務がない、というのでしたら、ひとを愛するということは、そのまま、二人のひとがおたがいにおたが

いのものであるというしるしになるわけでしよう。でも、たしかに――いまはもうそうではないような気がします。人生には諦めなければならないことがあります、愛を捨てなければならないひともあります。わたしにはいろいろのことがむずかしく、わけがわかりません、けれど、ひとつのことだけは非常にはつきりとわかります、ほかのひとを犠牲にしてわたし自身の幸福を求めてはならないし、また求めることはできない、ということです。愛するということは自然です、けれども、同情も、誠実も、思い出も、また、たしかに自然です。そして、そういうものはいまもなおわたしのうちに生きていて、もし、わたしがそれにさからうならば、わたしを罰することでしよう。わたしはほかのひとにくわえた苦しみにたえずつきまとわれるでしよう。無理におつしやらないでください。助けてください――力を貸してください、だつて、わたしはあなたを愛しているんですもの」[32]

Maggie は Eliot の作中人物中最も情熱的であつたが、その情熱をもつてしても、感情の奔放を求めはしなかつた。愛「恋愛」は自然であり美しいけれども、他人を犠牲にしては「汚される」のであつた。この愛の美しさを保ち、他人を傷けない為には、彼女は自己を放棄し恋人である Stephen と別れねばならなかつた。

この様に、renunciation はあらゆる場合に於て強く要求されたが先に述べた Human Goodness の第二の条件である尊敬とは、自分より偉大なものの崇拝、それえの服従を意味するのであつて、renunciation を要求する愛と、この尊敬[33]は、Eliot の謂う principle of subordination, of self-masters に相当すると見る事が出来る。

この原理の機能について Eliot は次の如く説明している。

「ひとたび服従と、克己自制の原理がわれわれの性質のなかにとり入れられると、われわれはもはや単なる印象や、欲望や、衝動のよせあつめではなくなり」……「この人世にはなすべき神聖な他の事があり、隣人の意見以上に高い善の法則がある」[34]との自覚に到達するのである。Eliot の考えた Human Goodness とはこの様にして到達され得るのであつた。而して Eliot が sense of duty を recognition of something to be lived for beyond the mere satisfaction of self. と換言している所から帰結すれば、duty の遂行は即ちHuman Goodness であると云う事が出来るであろう。

この愛他主義的な傾向は、その根底に人類愛を認める事が出来、本質的には Comte の Religion of Humanity に通ずるものであつて、*Daniel Dzronda* に於て人種の問題として採り上げられる契機となつた。

かくの如く、魂の問題は、経験に依る魂の法則の形成と、服従と克己自制の原理を媒介とする魂の目ざめとも称すべき義務観の自覚によつて解明されるのである。

× × ×

思想の展開として、この後に考察されるべき問題には、服従・克己自制の法則から導き出される義務観と、その義務観を宗教の一側面と見做して解明される宗教の問題が残つている。今迄扱つて来た種々の問題も、その根底に於ては多かれ少なかれ義務に関連のある事が認められるのであつて、Eliot の思想の中枢は義務観であるとみなす事が出来る。

さて、思想的にはこの様に一応結論に到達する事が出来るが、一方、今迄考察して来た Eliot の思想は小説の構成に著しい特徴を与えている。今迄述べた処では、進化論的人間観に基いた人物配置、性格と行

為の統一、性格の展開を主体とする分析的性格描写などが、小説作法上に於ける思想の具体的影響に依るものであると見る事が出来るが、更に小説の問題に関して考察を進めてみよう。

Ⅳ 小説の問題

G. Eliot の小説は、思想――多くの場合倫理観――の論理的展開を契機として展開する。換言すれば、Eliot の小説の plot は、性格と行為の有機的関係、魂の法則、服従と克己自制の原理などの内的必然性に従つて展開し、運命のいたづら、偶然の一致、突然の大事件などという所謂興味本位の外的事件に導かれる事は極めて少い。例えば、小作人に対しては善良で親切で、将来立派な人望ある地主として父の跡を継ぐであろうと約束されていた A. Dommithorn が辿つた悲惨な運命は、人間性の両極端の牽強附会的結合の感を与えるけれども、Eliot の解剖的手法は、彼の性格を解剖して、前述の如く、その生涯を決定した行為の胚芽を示し、彼の運命はその胚芽が必然的に発展した結果であると説明するのである。従つて、この様な内的必然性は、その展開の様相を意識・心理の上に於て跡づける心理描写に依つて reality 与えられているのであつた。その結果として、plot 展開に於ける心理描写の役割は極めて大きくなりここに心理小説の開拓が見られるのである。

しかしながら、小説展開の契機となつた内的必然性が、果して現実の人生を隅なく秩序づけ得たかについては考察の余地があるであろう。内的必然性を根拠とする Eliot の透徹した人生観自体、思想の間隙を流れる不合理・非合理の哲理や、漠然とした雰囲気を把握し得なかつたのではなかろうか。Eliot の心理描写は無意識に関しては全く傍観的で、雰囲気や漠然とした気分を対象としていない様である。人間の内面生活に必然性を認め、人生の合理的解釈を企てた Eliot の意図は、当時に於て、まことに斬新であつたが、Eliot の謂う必然性はモラルを目的としているのであつて、人生の合理的解釈自体が多分に道徳的傾向を帯びていた。即ち、Eliot の内的必然は道徳的判断の対象以外のものを包括していないのであつた。更に、Eliot は人間の精神生活に於てのみ適用される内的必然性を、外的必然性、即ち、勧善懲悪・因果応報に迄推し進めたのであつた。その結果、不自然な、劃一的人生が描かれる事となり、*Adam Bede* の Adam と Dinah の結婚には、D. Cecil の述べる如く、virtue の the handiest reward[35] が感ぜられ、*Silas Marner* の Godfrey Cass の幸福の問題（放埒な青年時代を過した為に Nancy と彼の間には子供が無く、又、Eppie も手許に引とる事が出来ず、従つて、彼に真の幸福は来ない）には牽強附会の poetic jnstice が見られるのである。

この様に、Eliot の強い道徳意識は、著しく人生に対する視角を狭める結果を生んだが、小説中で物語の展開を中断して屢々なされる道徳的談義も、その一つの現われであると見る事が出来る。

「われわれが人々の行為の動機を判断するとき、その判断はわれわれがわれわれ自身の感受性と経験から持ち出す資料の如何によつていろいろに変る、ということは明白である。だからわれわれは早まつた軽卒な判断を下さぬようにわれわれ自身の道徳的感受性に爪や蹄が生えてはいないか、よく注意してみなければならない」[36]などという談義に遭遇すると、G.H. Mair が (Eliot) is indisputably, because of her inability to fuse completely art and ethics.[37] と述べているのも一応頷けるであろう。勿論、彼が余りにも一方的である事は容易に理解

出来るが、物語の展開を中断して試みられるこの道徳談義は B. Johnson の述べる様に、*artistic blemish*[38] である事は疑を容れない。

さて、道徳意識の過剰に依る視角の狭隘を認めるにしても、視点が狭く限られているが故に Eliot はそこに思考を凝集して人生の深みを洞察し得たと云えるであろう。この事は、内的必然性に従つて描写・展開される諸人物が、たとえ平凡な人であつても、作者の道徳意識に由来する或種の深さを湛えている事によつても明らかであろう。水車小屋の娘 Maggie は、情熱と理性の葛藤を通じて人生の深みに到達する。しかしながら、彼女がその葛藤を体験して人生の深みに触れた時、彼女が水車小屋の娘であろうと、金持の事業家の娘であろうと、そういつた社会的身分は問題ではなかつた。彼女は提起された問題に深く没入する事に依つて形相的な存在となり、一つの精神的価値に到達するのである。

この様に、Eliot は視点を凝集せしめて人間の内面にある精神的価値に注目したのであつて、作中人物は何等かの形でこの価値を持つていたのである。E. Dowden は Eliot の作を読めば We are in the presence of a soul, and a soul which has had a history[39] を感ずると述べている。Eliot の作中人物は本質的に観念的存在であつた。

しかしながら、Eliot の小説は所謂観念小説では無いのであつて、観念的存在としての人物は現実社会の清濁の中に飽和されているのである。換言すれば、観念と描かれた現実社会の間には調和があつた。Adam Bede や Maggie Tulliver などは彼等の社会的地位や知的程度にふさわしくない程自己の行動に対し意識的で、また、それだけに偉大な観念的内容を持つていたが、彼等の風貌や生活環境から滲み出る一種の雰囲気は、彼等の観念なり思想の素朴さに於て調和しているのである。しかし、先に少し触れた様に、Eliot は人間を内的必然性によつてのみ把握し、G. K. Chesterton の述べる如く「雰囲気を通して見なかつた」[40] のであつて、*Adam Bede* や *Mill on the Floss* に於ける作中人物を包む雰囲気は、Eliot の身近な体験を素材とするこれ等の作品の性質からみて、創作の過程に於て無意識的に把握されたものであるという事が出来よう。この事は、又それとは逆に、Eliot が身近な体験を離れて、想像力による、或は、古い資料によつて創作した場合に全然雰囲気が把握されていない事によつても明らかであろう。

Such admirable judges as Robert Browning and William Story find a difficulty in reading it, from the falsity of life which it represents and Miss Blind tell us that Mazzini and Rossetti were of the same opinion.[41]

これは O. Browning の伝える Florence の歴史に通じた人々の *Romola* 評であるが、Eliot は十五世紀の Florence の歴史を精しく調べ、その街や風俗・行事を realistic に精緻に描写している上に、Romola, Tito の性格描写は向善・堕落えの展開の代表的型とも見られる傑作であり、又、*Romola* の theme は *Janet's Repentance* の発展で *Middlemarch* の Dorothea の生活信条の prototype とも云うことが出来るのであつて、これ等の諸点を綜合すれば、*Romola* は Eliot が常に生活の根拠としていた義務の問題を正面から扱つた作として、思想的に中心となる代表作であり、又、描写力の勁健に於ても一つの peek を示すものであるという事が出来る。これらの事情にも拘らず先の批評が妥当であるとするならば、それは間接的に *Romola* に於ける十五世紀の Florence の時代精神・風潮、或は世俗人心から

生れる時代独特の雰囲気の欠除を指摘しているのではなかろうか。例えば *Romola* の第十四章 A Florentine Joke を其他の作に見られる同様な場面、即ち、数人の人物が集つて世間話や冗談に時を過す様な場面、*Silas Marner* の居酒屋だとか *Adam Bede* の Mr. & Mrs. Poyser を中心とする Farm House などの場面と比較してみると、その間に時代や民族の差を思わせる様な差異は全く見られないのであつて、Florence の市民の生活感情は、十九世紀初頭の英国中部地方の人々のそれと全く同じで、従つて、*Romola* 中の人物は十五世紀の Florence を全く離れた存在であるという事が出来るのである。

要するに、素材が身近な体験に基くものである限り、Eliot は無意識的ながらも雰囲気を描き出すことに成功し、偉大な観念的人物は田園の雰囲気に包まれていたのであつたが、Eliot が素材を時間的空間的に遠くに求めるにつれ、更には、思想がより多岐にわたり複雑になるにつれ、又、meriolist としての意識が強まるにつれて、方法的に内的必然性によつて人生を解釈しようとする Eliot の作品は、現実社会の漠然とした雰囲気を無視し、思想的価値をのみ目標として、所謂観念的傾向を強めて行つたのである。O. Elton の巧な表現を借りるならば、While exhaustively describing life, she is apt to miss the spirit of life iself.[42] ということが、殊に *Romola* 以後の作品について、いえるのではなかろうか。

（大学院学生）

註

1 G.W. Cooke, *George Eliot* (Boston ; Houghton Miffin), P. 166

2 *Cambridge History of English Literature* Vol. XIII, P. 384

3 J.W. Cross, *George Eliot's Life* III, P. 267. in Eliot's letter to James Sully dsted 19 th Jan. 1877

4 David Cecil, *Early Victorian Novelist* (Pelican Books), P. 219

5 quoted G.W. Cooke, *op. cit.*, P. 207

6 *Mill on the Floss* (Finn & Co). P.132

7 *Felix Holt* (William Blackwood), stereotyped edition P. 193

8 *Mill on the Floss*, P. 452

9 F.W.H. Myers, "The Century magazine" for November, 1881. quoted G.W. Cooke, *op. cit.*, P. 225

10 *Mill on the Floss*, P. 485

11 *Felix Holt*, P. 428

12 *Middlemarch* (World Classics, 1950), P. 896

13 *Ibid.*, P. 896

14 cf. M. Toyoda, *Studies in the Mental Development of George Eliot* (Tokyo ; Kenkyusha, 1931) PP. 184—206

15 *Adam Bede* (Everyman's), P. 168

16 *Ibid*, P. 302

17 *Ibid*, P. 168

18 J.W. Cross, *George Eliot's Life* Vol. I, P. 472

19 *Adam Bede* (A.L. Burt), P. 71

20 G.W. Cooke, *op. cit.*, P. 290

21 *Mill on the Floss*, PP. 406—407

22 *Middlemarch*, P. 157

23 *Romola* (Grosset & Dunlap), P. 212

24 *Adam Bede* (Everyman's L.), P. 302

25 *Janet's Repentance* of *Scenes of Clerical Life* (Everyman's L.), P. 251

26 *Adam Bede* (A.L. Burt), P. 368

27 *Ibid.* (Everyman's L.), P. 350

28 L. Cazamian,「近代英國」(創元社), P. 182

29 *Adam Bede* (Burt), P. 492

30 *Ibid.*, P. 334

31 *Mill on the Floss*, P. 512

32 *Ibid.*, P. 458

33 *Janet's Repentance* in *Scenes of Clerical Life*, P. 250

34 *Ibid.*, P. 250

35 D. Cecil, *op. cit.*, P. 245

36 *Janet's Repentance*, P. 253

37 F.H. Mair, *Modern English Literature* (London; Oxford, 1951) Home Univ. L. P. 193

38 Brimley Johnson, *The Women Novelists* (W. Collins & Sono), P. 212

39 Edward Dowden, *Studies in Literature* 1789—1877 (London; Kegan Paul 1909) 10 th imp. P. 241

40 G.K. Chesterton, *The Victorian Age in Literature* (Oxford, 1947) Home Univ. L. P. 67

41 O. Browning, *Life of George Eliot* (London; Water Scott, 1890), P. 86

42 O. Elton, *A Survey of English Literature* 1830—1880, (London; Edward Arnold 1920), Vol. II, P. 260

(三十二頁より)

The Purgatorio and the Paradiso, *Selected Essays*. p. 242) 伝統の基礎の上に立つ彼のカソリック的な宗教感覚を或程度に想像する事しか出来ないとしても、止むを得ぬ事ではなかろうか。要は社会的な約束でしかない right or wrong の問題ではなくして、個々の魂が撰択に直面をしめられている人間の本質的な good or evil の問題であるからである。同じ主題は植民地の警官(事件の核心)や、小説家と人妻(情事の果て)という、より一般的なグルントで展開されて行く。

(未完)